

平成 27 年 12 月 1 日

平安宮^{ぶらくでん}豊楽殿跡発掘調査 成果発表資料

調 査 地 ： 京都市中京区聚楽廻西町 8 6－3 番地，8 7 番地
(史跡 平安宮跡豊楽院跡隣接地)

調査主体 ： 京都市文化財保護課

調査期間 ： 平成 2 7 年 9 月 1 日 (木) ～ 1 0 月 2 日 (金)

調査面積 ： 1 1 7 m² (東区 54m²・西区 63m²)

はじめに

今回の調査は，平安宮豊楽殿跡における範囲確認のための発掘調査です。豊楽殿を正殿とする豊楽院^{ぶらくいん}は，朝堂院の西側に隣接しています(図 1・7)。豊楽院では平安時代前期の儀式書である『内裏式』や『儀式』によると，天皇が出御する正月の元日，七日白馬^{あおうま}，十六日踏歌^{とうか}，十七日射礼^{じやらい}の各節会^{せちえ}のほか，大嘗会^{だいじやうえ}や新嘗会^{しんじやうえ}が行われ，『西宮記』には「天子宴会之处^{さいぐうき てんしえんかいのところ}」と記されるなど，国家の饗宴の場としての威容を誇っていました。豊楽院の造営は平安遷都よりもやや遅れ，延暦十八年(799)，正月七日の白馬節会を催すにあたり，「豊楽殿未成功^{ぶらくでんいまだこうならず}」とあることから未完成だったことがわかります。大同三年(808)には平城天皇の大嘗会が豊楽院で執り行われていることから，その頃までに完成していたことがわかります。

これまで，豊楽殿では昭和 51 年に工事中の立会調査で礎石根固めの壺掘地業^{つぼほりじぎょう}を 1 箇所検出したほか，昭和 63 年の発掘調査では，壺掘地業 5 箇所と北側中央階段，西階段及び北側の清暑堂^{せいしょどう}とを繋ぐ北廊の跡を確認しています(図 5)。これらの調査成果から，豊楽殿は身舎桁行 7 間，梁行 2 間の四面庇付^{ひさし}東西棟礎石建物であることが明らかとなり，柱間は身舎桁行 15 尺，梁行 14 尺，底の出が 13 尺，基壇の出は 11 尺と復元されました。

今回の調査区は豊楽殿の身舎部分にあたり，特に東区は道路よりも一段高くなっていることから，基壇盛土が良好に残していることが期待できました。

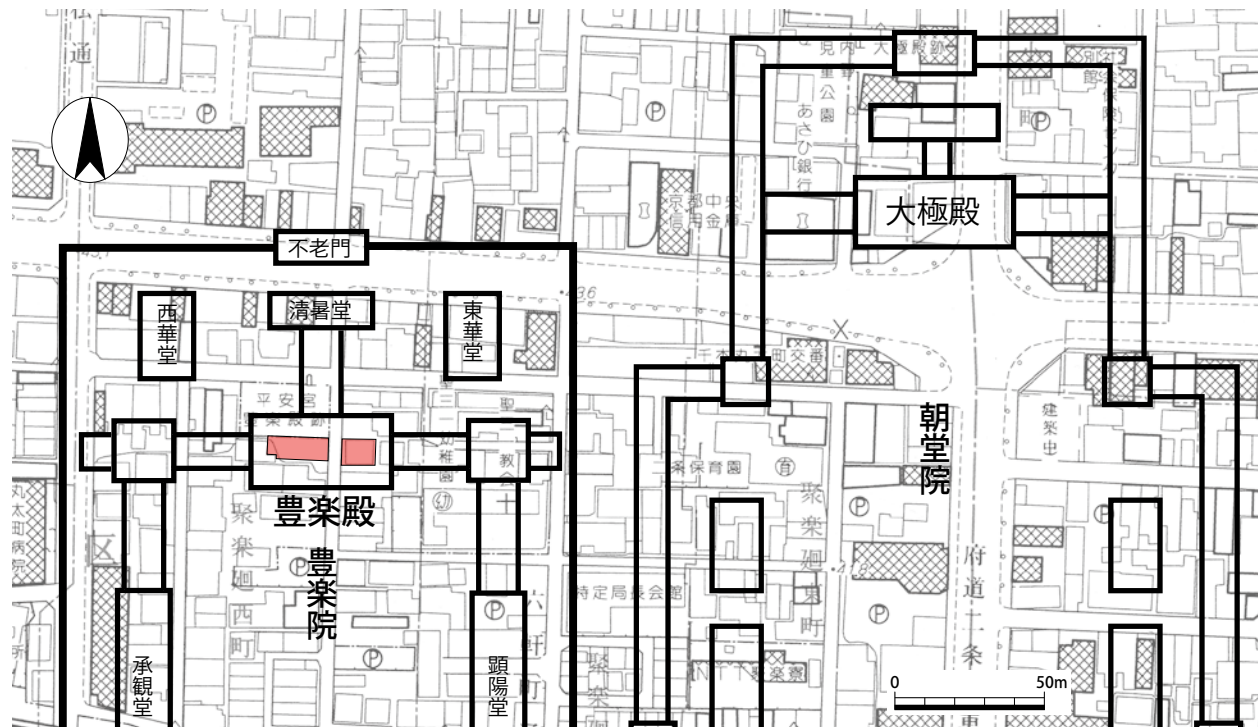


図 1 発掘調査位置図 (S=1:2,500) ■ 今回の調査地

調査概要

○西区(図 2，写真 1・2)

豊楽殿身舎の北西部分にあたります。後世の改変によって，削平を受けていますが身舎部分の壺掘地業を 4 箇所確認しました。

壺掘地業(写真 1) 身舎桁行柱筋の礎石根固めの壺掘地業です。いずれの地業も調査区外に広がり，削平を受けているため全容は不明ですが，一辺 1.8 ～ 2.6m，深さは残りの良いもので 0.3m 残っていました。桁行柱間は 15 尺(4.48m)であることを改めて確認しました。

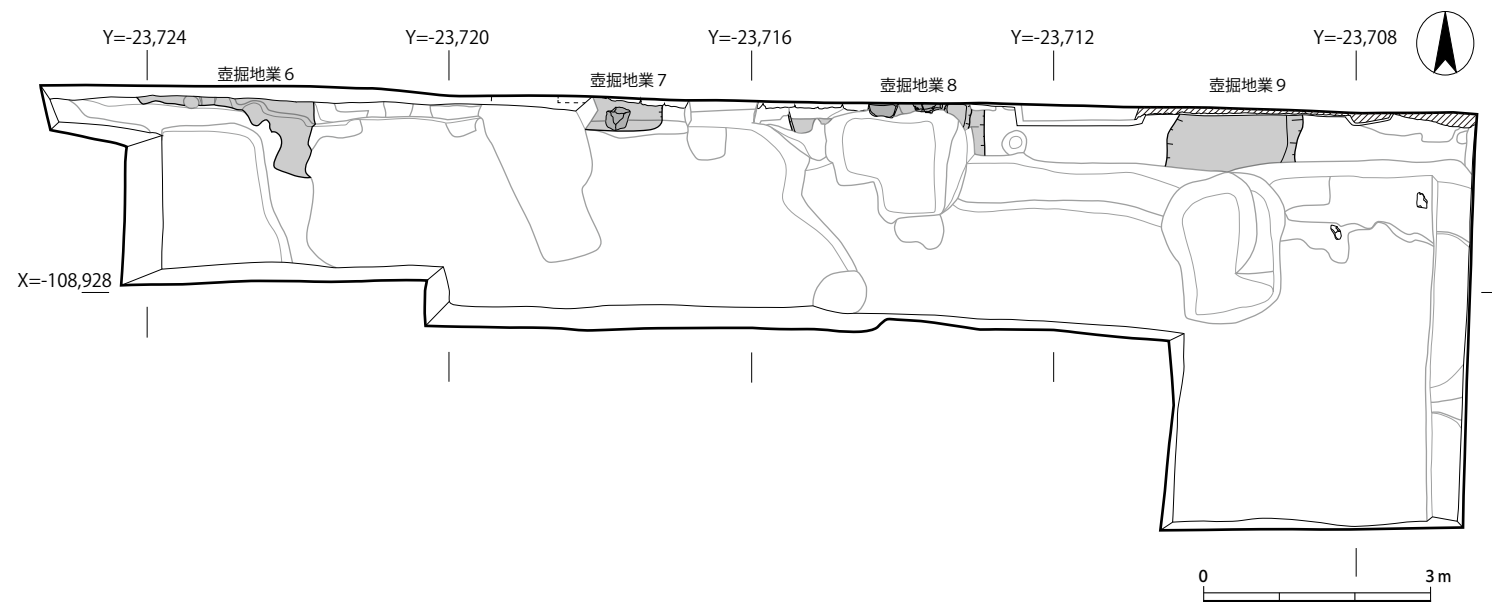


図 2 西区 (S=1:100)



写真 1 壺掘地業 7 (南から)

写真 2 西区と史跡平安宮豊楽殿跡 (東から)

○東区（図3・4，写真3）

豊楽殿の東半にあたります。東区は道路よりも一段高くなっており，調査の結果，豊楽殿の基壇盛土と，複数の壺掘地業を確認することができました。

基壇^{たちわり} 基壇の断割（断割1）を行った結果，構築手順は以下のように復元できます。

①北から南に向かって下がる自然地形の斜面地に基壇を構築するにあたって，地山の上に約15～20cm厚の盛土を行い平坦面を造りだす（盛土1）。盛土は周辺に広がっていたと考えられる黒褐色粘質土を用いる。

②盛土1上面から礎石据付位置に壺掘地業を構築する。地業の深さは地山の状況によって異なる。

※壺掘地業の構築方法は後述

③壺掘地業構築後に，各地業の上に直径0.4～1.2mの石（花崗岩，チャートの河原石）を据え付ける。石を包み込むように礫を含む非常に固く締まった黄褐色系と黒褐色系の粘質土を用いて厚さ数cm単位で凸面レンズ状に版築を行っていく。凸面レンズ状の版築は，地業よりも一回り大きい直径約3m，高さ約0.5mの円丘状を呈す（円丘）。また，レンズ状の版築と並行して各地業間の版築を行う（版築1）。版築1は約10層あり，厚みは全体で約30～40cmとなる。非常に固く締まった小礫を多く含んだ黄褐色系と黒褐色系の粘質土を交互に用い，厚さ2～5cmの単位で構築する。

④版築1の上に，礫をほとんど含まない黄褐色シルトを主体として，厚さ6～10cmの単位で版築を行う（版築2）。版築2は最大で35cm残る。

版築2の上面には礎石や礎石を据え付けた痕跡が認められないことから，本来の基壇は更に1m以上高かったものと想定できます。



写真3 壺掘地業2（北から）

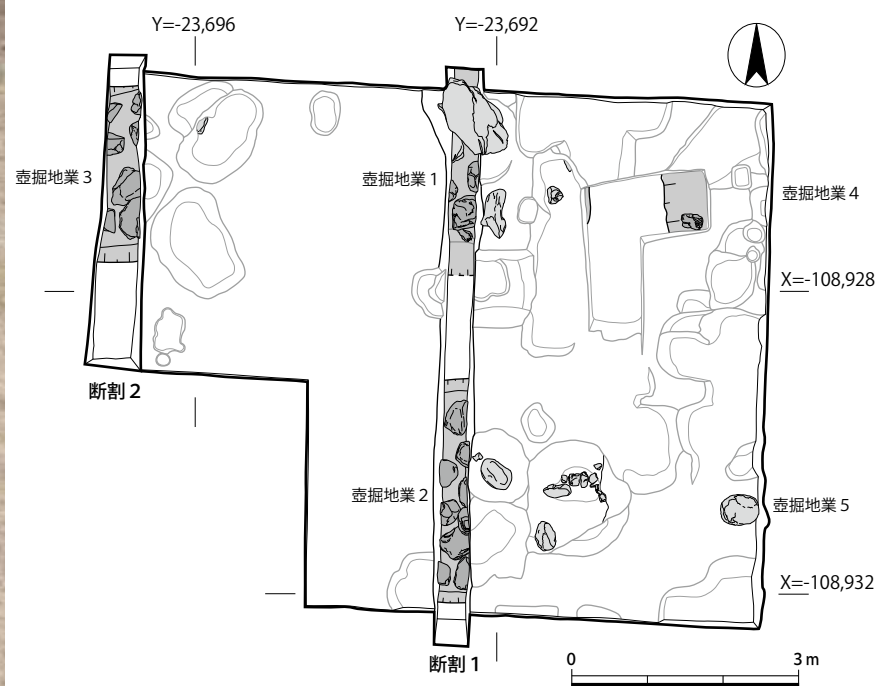


図3 東区（S=1:100）

壺掘地業 身舎の3箇所，底の2箇所で地業を確認しました。地業の規模は2.5～2.7mですが，身舎隅柱である壺掘地業1は最も大きく，直径2.7m以上あります。

ここでは，構築方法が明らかとなった壺掘地業2について述べます。

①盛土1の上面から，直径2.7m，深さ0.4mの穴を掘る。穴は非常に固く締まる黄褐色シルトの地山まで掘り下げている。

②底に直径35～45cmの石を重ならないように複数個並べる。石の間を黒褐色粘質土や砂，礫を多く含んだ非常に固く締まった土で叩き締めて版築を行っていく。版築の単位は2～10cmで，合計7層。石は底だけではなく，地業の上場まで重ならないように並べて版築を行っていく。

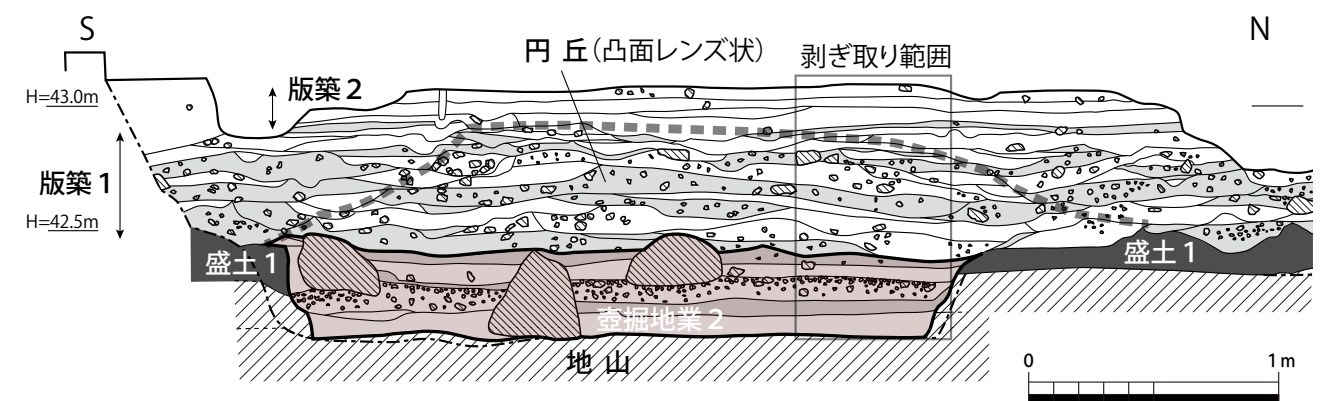


図4 断割1南半断面図（S=1:30）

まとめ

今回の調査成果をまとめると次のようになります。

○豊楽殿の礎石根固め壺掘地業を合計9箇所（身舎7箇所・底2箇所）確認しました。地業は周辺調査成果と合わせ豊楽殿の建物規模は身舎が桁行7間，梁行2間で四面に庇が付く東西棟礎石建物で，柱間は身舎15尺等間（これまでは桁行15尺，梁行14尺），底の出が12尺（同13尺），基壇の出は13尺（同11尺）となることがわかりました。この規模は平城宮第二次大極殿とほぼ同規模となります。長岡宮大極殿は難波宮大極殿を移築したとされており，平城宮第二次大極殿は，平城上皇が平城宮に居住する大同四年（809）以前に解体されていることが発掘調査で確認されています。豊楽殿も大極殿も天皇が出御する最も格式の高い建物であることから，大極殿の移建先の候補として非常に興味深いものがあります。（ただし，豊楽殿の瓦は平安京遷都以降に新造されたものです。）

○豊楽殿の基壇版築を約70cm確認し，基壇の構築方法が明らかになりました。基壇の構築途中で壺掘地業を行い，礎石の据付位置の下方に円丘状の盛土を行う方法は，恭仁宮大極殿でも認められます。この工法は現在のところ，都城固有の工法とされ，当時最先端の土木技術を用いていたことがわかります。

豊楽殿は平安宮の中で，天皇が出御する大極殿と並ぶ格式を持つ建物です。平安宮の大極殿は大半が道路用地になっており，遺構の残存状況が悪く全容の解明は困難といえます。したがって，豊楽殿の建物規模と基壇構築方法の解明は，大極殿の構造を知るための重要な手懸かりとなります。

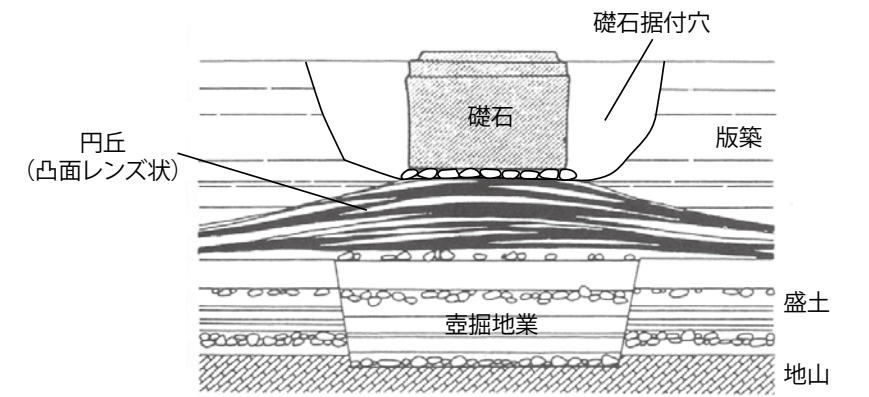
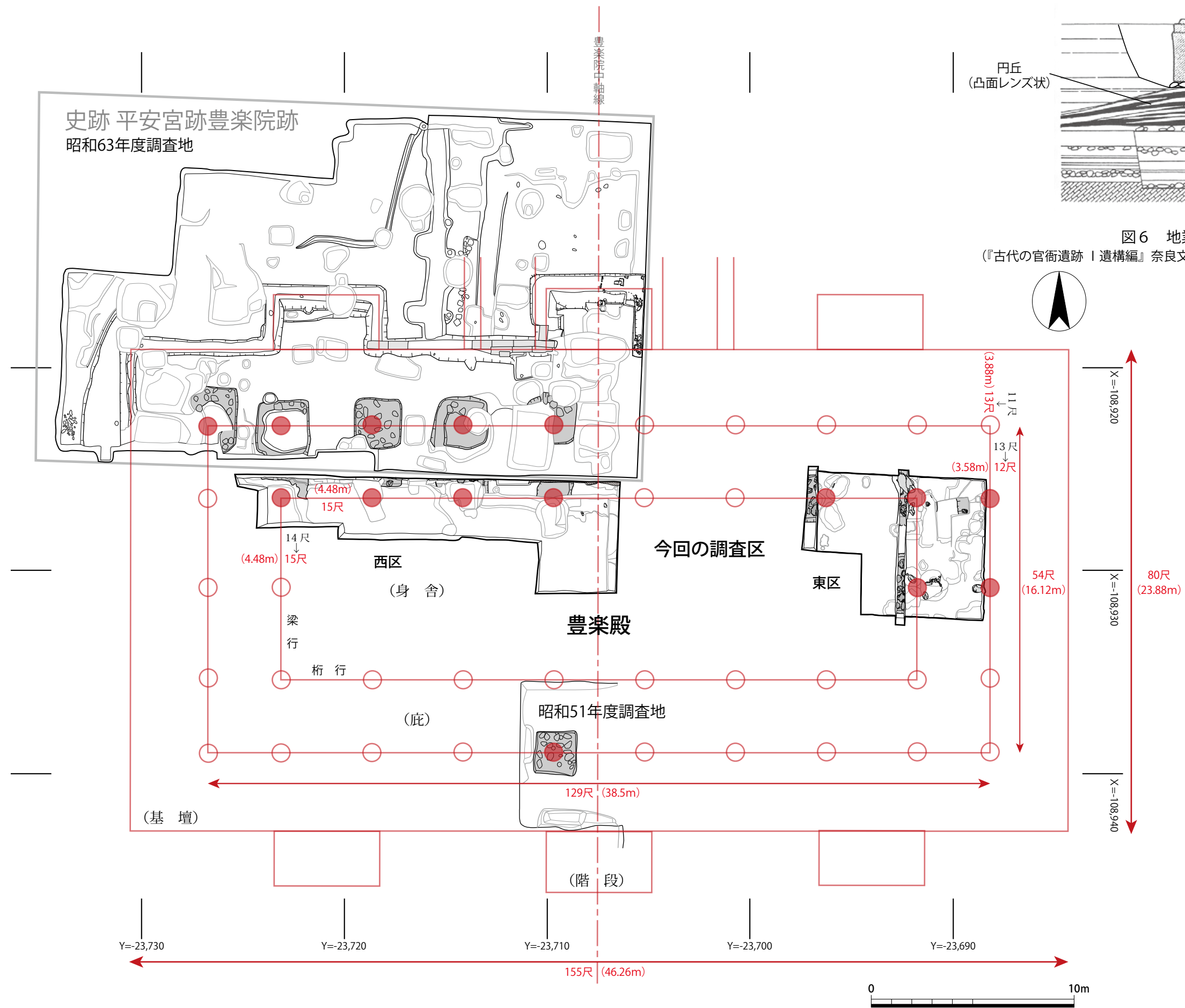


図6 地業模式図
 (『古代の官衙遺跡Ⅰ遺構編』奈良文化財研究所, 2003 から転載加筆)

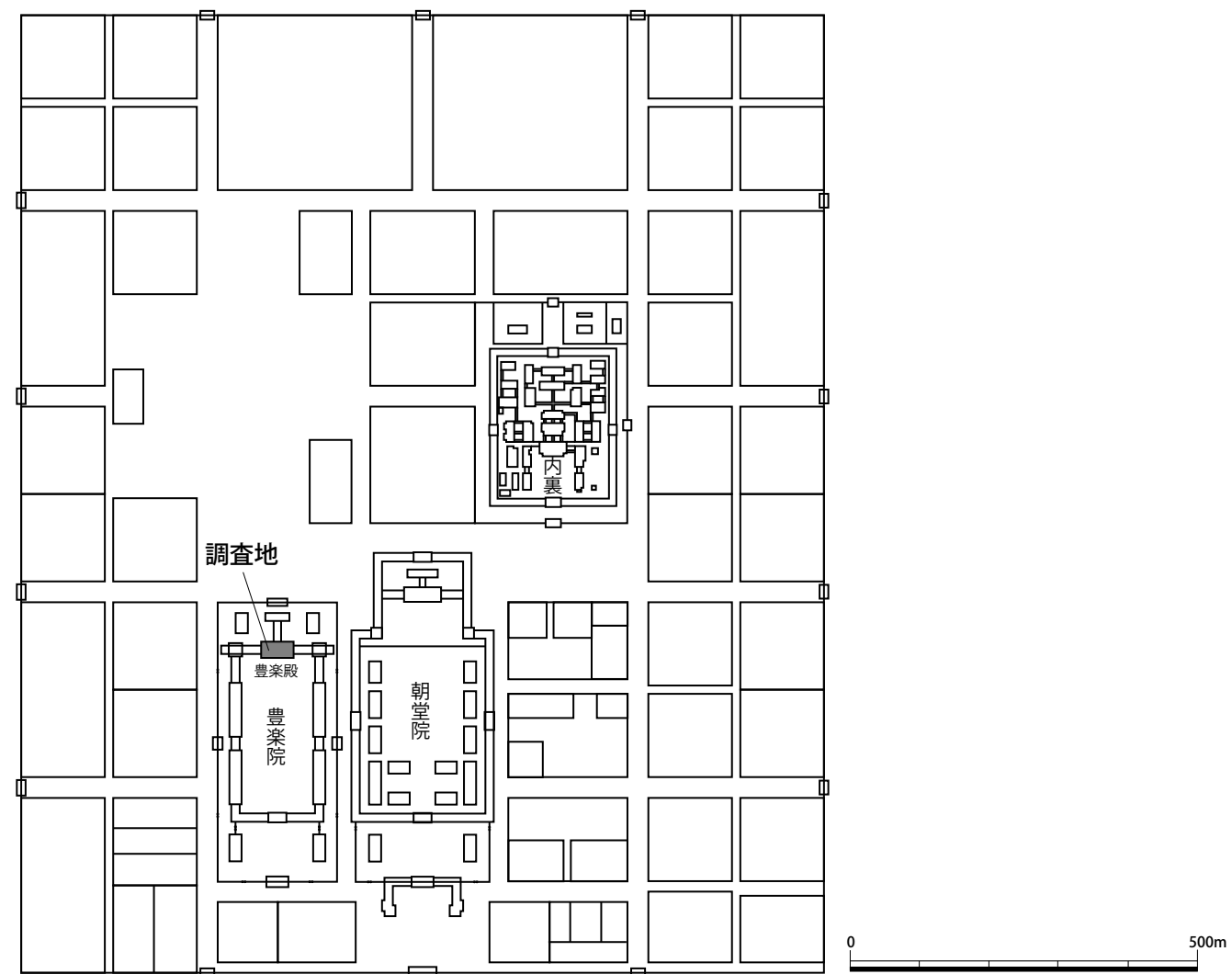


図7 調査位置図 (S=1:10,00)



図9 豊楽殿復原イラスト（北西から）画：梶川敏夫

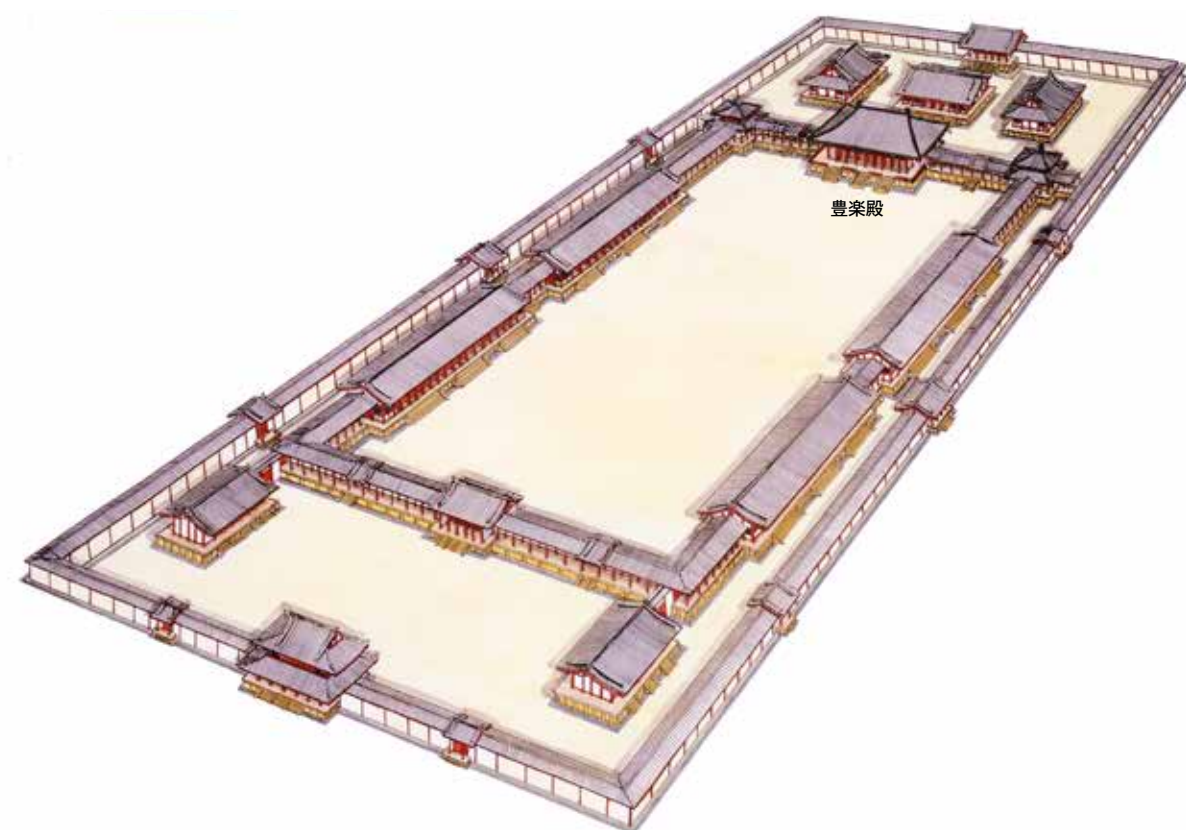


図8 豊楽院復原イラスト（南東から）画：梶川敏夫

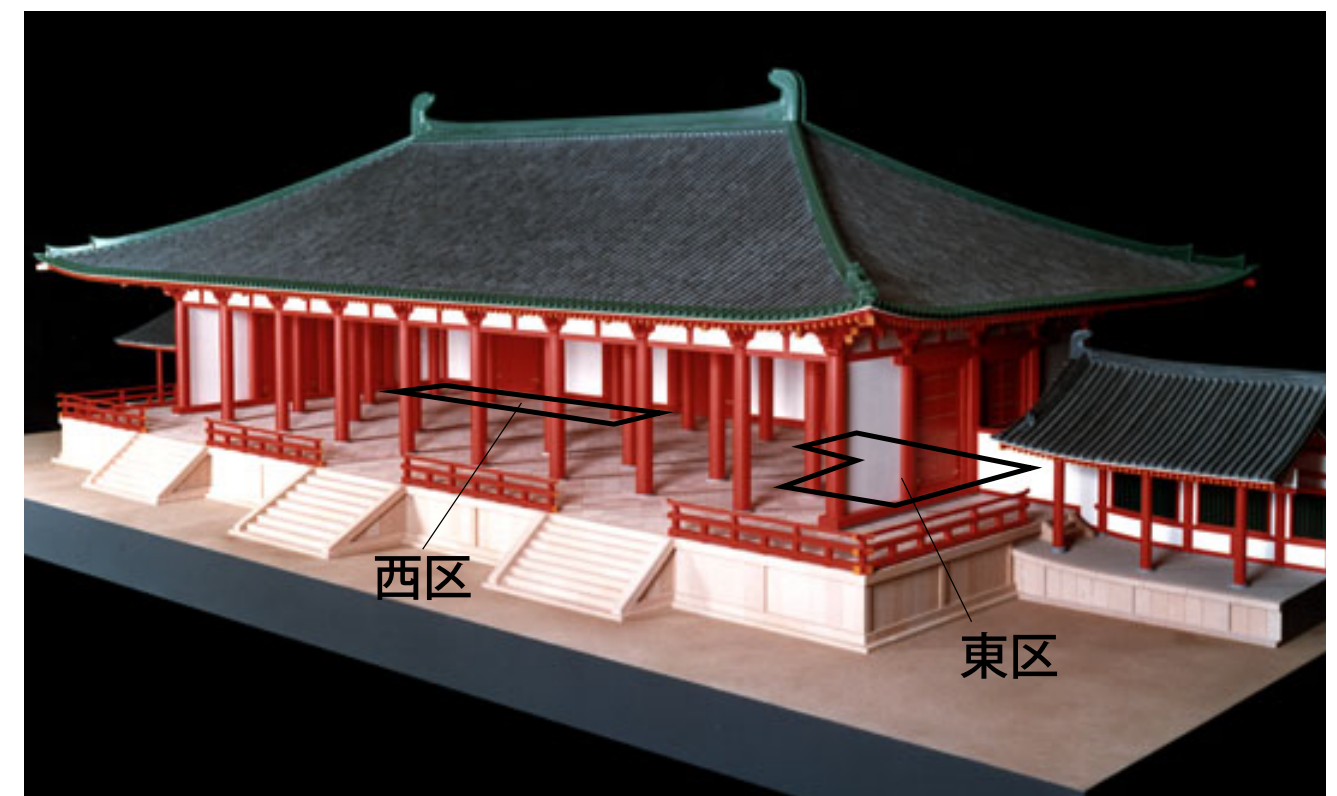


写真4 豊楽殿復原模型（京都アスニー平安京創生館にて展示中）